

40歳前後の女性である。10年以上前に腰椎4番・5番が前にずれている脊椎すべり症と診断された。ずっと様子見で、カイロプラクティックの治療を受けたりしていたようだ。それが最近になって、腰痛や左下肢全体の違和感・しびれ感があり、左下肢に十分に力が入らなくなっていた。そのため最近、整形外科で手術を強く勧められたと言う。かなり不安そうな様子で来院した。

脊椎の関節突起のあいだで骨の分離もある脊椎分離すべり症であり、椎間板ヘルニアも伴っている。その他にも左背全体の凝り感、両手指のしびれ(左>右)、食欲不振、のぼせ、手足の冷え、息切れなどの症状がある。西洋医学では脊椎すべり症とこれらの症状は全く別のものと捉えるが、東洋医学では一体と観る。

慢性的な胃腸の不調(虚気)が先にあると、それ(虚気)が背筋に影響し、脊椎を支えている筋を緩ませ、脊椎をすべらせたと推測できる。脊椎のずれにより、腰から足先まで伸びている坐骨神経の神経根が圧迫等の影響を受け、坐骨

神経を通じて左下肢全体の症状を生んでいる。胃腸の不調は同時に背全体も凝らせ、特に肩甲骨外側を強く凝らせていて、それが手指のしびれを生んでいる。

治療のイメージはこうなる。気虚による胃腸の不調を整えると同時に、すべり症をもたらした腰椎を支える筋に気を巡らして筋を正常化し、緩みをなくしてすべりを改善する。そのために腰部の虚を補い、同時に部分的な腰の凝りを瀉して緩める。また、手指にしびれをもたらしている肩甲骨外側の凝りを緩めることである。

まず、仰向けに寝てもらおう。お腹は虚しい強い張りはないが、軽く按じても痛みを感じる。手足から経脈を通して、異常部分に鍼で響きを与えて正常化を促す。次に、うつ伏せで背全体に鍼して整える。特に肩甲骨外側の凝りにある圧痛点にやや痛みを感じる程度に瀉法で鍼をし、同様に腰部の凝りにある圧痛点にも鍼をした。その後、足首付近の崑崙というツボに足先方向に鍼先を向けて軽く刺して置き鍼をして気を流す。気を流しながら、腰部の虚したツボ

に線香灸(お灸の代わりに線香をツボにかざす)で補った。そうした治療を3ヶ月程、毎週1回行った。

食欲不振・のぼせ・息切れ等の自覚症状はなくなり、手指のしびれや腰痛もかなり軽減された。左下肢の力も入る様になり、医師が驚いていたと言う。手術が強く勧められることはなくなったと患者は喜んでいた。

(2016年9月秋分)

